

我が戦争と抑留の青春

兵庫県 石坂博信

序文(戦闘)

昭和二十年(一九四五)八月八日夜、満州黒龍江流域及び東部国境一帯に強い雨が降り、八月九日零時ごろ、ソ連軍は各方面で国境線を越え、九日朝から主力は満州内部への進撃を開始した。東正面牡丹江付近は、沿海州にいた第一極東方面軍の東方から攻撃するソ連第五軍(狙撃師団十二個、戦車旅団五個など)と、北方から攻撃してきたソ連第一赤旗軍(狙撃師団六個、戦車旅団三個など)であった。

これを迎えた東部正面防衛の我が第五軍第一二四、第一二六、第一三五の三個師団は、ソ連軍主力の猛攻を八月十五日夕まで阻止し、この間に、牡丹江在留邦人約六万人の無事後退を完成することが出来た。十五日夜、軍命令で、第一二六、第

一三五師団の二個師団は横道河子に後退し、十七日、停戦命令を受領。第一二四師団は寧安で二十三日武装解除した。

私の元所属の第一二六師団歩兵第二七九連隊は編成直後、師団の左第一線として陣地構築中、開戦を迎え、第二大隊は現地の自興屯、第一大隊、第三大隊は牡丹江の両戦場に分かれ激戦を交えるに至り、数多くの将兵が戦死いたしました。

昭和二十年二月、私は故郷の神戸から現役兵として元満州第十一国境守備隊「観月台」に入隊した。十五日、広島西練兵場に集合し渡満。途中、輸送船内で二度にわたる米潜水艦魚雷命中時の退船訓練を実施し、下関港から八時間後、無事に朝鮮半島釜山港に上陸。列車で半島を北上し、鮮満国境満領図們を通過、牡丹江から東へ……終点の国境の街、綏芬河に到着した。ソ連との国境線近くを通る行軍は夜行軍で、二十四日夜明け前に目的地「観月台」に到着した。真白な雪の山を背景に灰色のレンガ造りの兵舎が整然と建ち並んでい

た。

私の所属は工兵隊（金鷄隊）で、部隊長菊池永雄大佐、工兵隊長佐藤五郎大尉であった。

観月台

この観月台は綏芬河の北方約三十二キロ、ソ連領ウラジオストック北方に対峙したソ満国境の最前線。剣山・武蔵山・長崎山と連なる主陣地と、その両翼に大鉄山・順天山の副陣地が在った。主陣地は敵の砲爆撃に十分耐え得る永久陣地として構築されていた。

守備兵力は、歩兵四カ中隊、砲兵二カ中隊、工兵一カ中隊弱、重砲（二十八榴）隊一カ中隊弱、高射砲（二門）隊一カ小隊であった。

戦局の悪化に伴い新作戦準備の発動となり、昭和二十年五月下旬、歩兵隊及び工兵隊は、菊池永雄部隊長と共に観月台を後に出発、八面通へ移動した。砲兵隊は、これより前に綏西の部隊へ転出していた。

編成（歩二七九連）

六月下旬、八面通において元満州第十一国境守備隊の主力を基幹とし、歩兵五七五大隊（佳木斯）並びに現地召集兵を充当して編成された第一二六師団歩兵第二七九連隊（連隊長菊池大佐・第一大隊長猪足大尉・第二大隊長五十嵐大尉・第三大隊長奥村大尉・満州第二一〇七二部隊、満州第一二五六〇部隊）は師団命令に基き一部を八面通に残し、主力を以って自興屯に至り第一二六師団左第一線として、その地に陣地の構築を始めた。

陣地構築着手直後、私は連隊より第一二六師団（野溝式彦中将）参謀部築城班勤務を命ぜられ、開戦時までそこで勤務した。

司令部

司令部は、八面通に通じる道路の左側（北側）の小高い山の中腹で平坦な所にあった。司令部各部の幕舎は、いずれも大きな八垂形の天幕で、一段高い位置の参謀部を中央に、兵器部・医务部・經理部の各幕舎が両翼にあった。参謀部の幕舎は、中を二つに仕切り、西側には師団参謀長田中正司

大佐と師団参謀荻野重幸中佐がおられた。お二人共非常に優しく、種々ご指導を受けた。間仕切東側の築城班は、班長工兵木村中尉、曹長、軍曹の下士官二人、当番平位上等兵と私の五人で、家族的雰囲気の中、勤務した。勤務は作戦地図、陣地編成図等図面作成が作業の主であった。

八月六日夕刻、私達司令部勤務兵全員は衛兵幕舎前に集合。第五軍司令部（掖河）から帰った野溝師団長より訓示があった。

「……いつソ連が戦争をしかけて来るかも知れない緊迫した状態である。もしソ連が侵攻して来た時は、旗本である諸君と共に、「決死敢闘」「玉砕」する覚悟である……。」

八月八日、掖河の第五軍司令部に各師団長及び参謀長等が集まり、ソ連の攻撃に備えての高等司令部演習があった。

まさか数時間後、ソ連の侵攻があるとは思わなかった。

ソ軍侵攻

夜半前、激しい雷雨があった。雷雨もあがり、しばらく経つと、ブーンブーンと聞きなれない飛行機の爆音が聞えた。不審に思う間もなく、小型爆弾と照明弾の投下を受けた。辺り一面真昼の様に明るくなり、各所部隊の幕舎が鮮やかに浮かび上った。ソ軍攻撃開始と直感。

時あたかも「昭和二十年八月九日午前零時過ぎ」であった。

早朝、命令が出る。

「師団司令部勤務の兵は、司令部衛兵を除いて皆、原隊に復帰し、戦闘に参加せよ」

司令部を後に出発。十三時半ごろ、原隊の第三大隊機関銃中隊に着いた。玉田中隊長に原隊復帰を報告し、すぐ食事をして空腹を満たす。

出陣前、中隊長命令で、各自の大切な物、国旗・家族の写真及び防毒面、常用外套・背囊等を大隊本部前に持参、山積みして焼却する。

出陣

「……これより軽装備で、二、三日分の食糧を

持つて、総員爆撃勇士となり、君国のために尽す！」

第三大隊長奥村大尉の力強い訓示を受ける。

十六時半ごろ、抜刀した大隊長は、ソ軍何するものぞの意気込みをもって自興屯陣地を出発し、夜半、連隊本部前に集結した。本部の前は右往左往、入り乱れる人馬でいっぱい、慌ただしい混乱の中、弾薬を受領した。ここより行軍は不眠不休の急強行軍。食するのも歩きながらという状態であった。やっと鉄路に出た。そこは丁度仙洞駅の近くであった。

仙洞で無蓋車に乗車。直ちに機関銃を高射に据え、弾薬を装填、敵機の来襲に備えた。

牡丹江駅構内で停車中、ソ軍機の空襲を受ける。

高射姿勢の機関銃で応戦する。

八月十日午後、掖河より行軍で愛河に到着。

布陣

八月十日午後四時から、牡丹江より綏芬河まで通じる道路の北側に沿ってタコツボ（一人用立射

散兵壕）を掘った。

夜、ヤブ蚊が襲来、夜明けが待ち遠しい。

八月十二日、3MG（三大隊機関銃中隊で以下三機と言う）は道路と鉄道線路を横切って五〇三高地に移動する。（第三大隊布陣地）

八月十三日、早朝より壕を掘り、新たな陣地配備につく。東の山の裏手の方では、前線部隊である第一二四師団とソ連とが激戦中らしく、ダーン、ダーン！ピカピカッと断続音と閃光がきらめく。

奥村大隊長が玉田中隊長の所へやって来て、「大分激しくやっているなあ、明日あたりは我々のところになる……」と話していた。

愛河五〇三高地の戦闘

八月十四日、牡丹江街道北側五〇三高地の歩兵第二七九連隊第三大隊（奥村良夫大尉）は、午前八時ごろからソ連軍の砲兵射撃を受けたが損害は軽微であった。しかし正午ごろ、有力な砲兵観測所が大隊陣地南東方八百メートルの高地突角に進出し、我が第一二六師団地域全般を観測する態勢

をとつた。歩兵第二七九連隊長菊池大佐は、この観測所撲滅の必要を認め、同日午後、連隊直轄の第九中隊第一小隊宮崎末広伍長以下約五十人をもつて攻撃させた。第三大隊も同夜、第八中隊の吉成正一郎准尉以下約二十三人をもつて斬り込みをさせたが、いずれも不成功で、多数戦死傷を生じた。この正面のソ連軍は第二一八戦車旅団と第一四四狙撃師団であつたが、同夜、約一個大隊が前面高地に進出した。

八月十五日。この日早朝から午後四時ごろまで、砲兵陣地地域、各歩兵連隊陣地等師団の全縦深にわたり激しい砲撃を受けた。師団左地区の歩兵第二七九連隊では、前日に引き続き、牡丹江街道北側五〇三高地の第三大隊陣地南東に進出したソ連軍砲兵観測所攻撃のため、早朝、連隊本部から通信中隊の山本明治見習士官以下約三十五人を、第三大隊からは前夜派遣した吉成斬り込み隊の救援と収容のため、第三機関銃中隊から占部義雄軍曹以下約十二人と内山裕一伍長以下約十三人を派遣、

更に午前八時ごろ、第三機関銃中隊長玉田琢中尉以下数人を派遣したが、いずれも有力なソ連軍の攻撃を受け、多数の戦死傷を生じ不成功に終つた。玉田中隊長も戦死する。

歩兵第二七九連隊第三大隊前面のソ連軍歩兵約一個大隊は、午前十時ごろ、優勢な迫撃砲及び牡丹江街道方面の戦車砲等の支援を受け、第三大隊陣地北翼方面から逐次攻撃を開始した。五〇三高地の山上より望見すると、ソ連軍は重戦車を先頭に主力歩兵部隊がこれに続く。戦車砲より攻撃する黒煙がよく見える。

愛河の我が連隊本部前に布陣した砲兵隊十五榴の敵陣への砲撃が始まつた。我が陣地山上の南側上空を飛び交う敵味方の砲弾が、空気の渦を巻き尾を引きながら飛んでいくのが見える。ブルブルツ シュシュツと。

ソ連軍はカチューシャ砲によりロケット砲弾を撃ち出した。赤い火を噴き、うなりながら飛来する。弾丸は秒差で落下し炸裂する。物凄い衝撃で

山が揺れ動くようだ。

掖河の兵器廠の建物にロケット砲弾が命中し、黒煙を上げ始めるとみるや、赤い大きな火柱を噴き出し、大爆発音が轟き渡った。

十五日正午ごろより、我が第三大隊陣地にソ連軍は攻撃の主力をそそいできた。

前方の山の斜面を、自動小銃（マンドリンと称していた）を連射しながら斜め横隊にて降りて来た。彼我の直線距離は約八百メートル……我々三機中隊はそれに応戦、攻撃を開始した。敵迫撃砲攻撃も激しくなり、我々の前後左右に、シュルシュル ダアーン！と黒煙と土煙を上げて炸裂し、視界を奪う。重機関銃、軽機関銃、小銃、擲弾筒にて応戦する。この時の陣地配備は、三機中隊を中央にして、右翼に七中隊（錦木隊）、左翼に八中隊（霞末隊）であった。

三機中隊の射手、弾薬手等も負傷する。敵の火力はますます激しさを増してくる。午後二時ごろには陣地直前に殺到した。我が大隊は全火力を集

中して防戦したが、多数の戦死傷を生じたので、午後二時三十分ごろ、大隊長奥村大尉は牡丹江方面への転進を決意した。

午後三時ごろ、西側後方の高地に移動する。先ず七・八中隊より移動。その間、我が三機中隊は援護射撃を続行した。七・八中隊の移動がほとんど終りかけた時、私たち三機中隊は西側高地へ移動を始めた。移動中も敵砲弾の落下激しく、前後左右に炸裂、黒煙と土煙の中を、まるで三角形の底辺より先端に行くように、次第に兵員が減っていくようだ。……夕暮れ、愛河の街を眼下に見下ろす山の斜面に一時集結するが、残存兵は半数に満たなかった。いずれも黒くすすけた汗の流れた顔だった。

陣地撤退

軍命令により「陣地を撤退し、生き残り全員が集結、各部隊、横道河子の山中陣地にてソ連軍を邀撃する！」との報を聞き、暗夜になって牡丹江方面へ撤退した。

途中、暗夜の中、街道の三叉路にて、私達が来るのを待っていた松本少尉（三機第一小隊長）と運よく合流することが出来た。

牡丹江東の鉄橋にさしかかると、ソ連軍進撃阻止のため「十分後に工兵隊が爆破するぞ！」「早く早く、急げ急げ！」

他部隊の隊長の声を聞きながら慌ただしく橋を渡り、牡丹江市内へと入った。前方正面の忠霊塔（若しくは記念碑か）が見える大きな街路を直線的に進んだ。忠霊塔裏の山中に入り夜を明かした。

八月十六日

牡丹江から拉古までの道中は、ソ軍機の銃爆撃を受け丸焼けとなった輸送用トラック、人馬の死体が各所に転がり、攻撃の凄まじさを見せつけられた。拉古駅で最後のハルピン行き貨車に乗り込むことが出来た。他部隊の兵士達と一緒に乗った。次の海林駅で一時停車した。待っていたかのようにソ軍機の波状攻撃が始まった。列車の進行方向上を真っ直ぐに低空（操縦士の顔が見える）

で飛来し、頭上より機銃掃射の雨である。その合間を見て「全員、車外に出て隠れるッ」と命令の声が聞えた。私は車外に飛び出したと同時に、攻撃の間を利用して駅舎に突進し、石張りの外壁に貼りついて銃撃から身を守った。

松本少尉も車内から脱出の際、足に被弾されたが軽傷で、私達に「お前達は、飛行機に注意して行け！」と命令指示された。

昼間は畑や山の中を、夜は鉄道線路沿いの道を歩いた。

十八日未明、山中から線路に沿う道路を進むソ連軍機甲部隊を望見、完全にソ連軍に包囲されたと判断し、夜だけ歩くことにした。

八月十九日夕暮れ、横道河子付近に着いて「停戦」を知る。運よく、山中に先着して私達を待っていた第三機関銃中隊と合流できた。

翌八月二十日、武装解除。

私達は兵器をソ連軍に引き渡したが、激戦を共にしてきた兵器との別離は耐え難く、丁寧に手入

れされた一部の兵器（重機関銃）は、今も横道河子の山中に眠っている。

戦場に散った戦友へのはなむけとして……。

作業大隊―入ソ

横道河子にて武装解除された私達は、海林の関東軍弾薬置場の広い集結地に收容され、その後、ソ連軍の命によって作業大隊が編成された。我々歩兵二七九は、第一大隊長猪足大尉が作業大隊長となり第一三三作業大隊は編成され、九月上旬、海林の收容所を出発した。徒歩にて牡丹江・愛河・穆稜・綏陽・綏芬河を経てソ領グロデコーウまで行軍。グロデコーウ郊外の高原で約半月ほど野宿生活が続いた。付近農園から三十センチほど刈り残した麦ワラを取って来て山に積み上げ、その中に身体を入れ、首から上を出して星空を仰いで寝る生活となった。

十月上旬、ソ連側の「帰国」の言葉を信じて貨物列車に乗り込んだ。列車の窓より見る太陽の位置により、誰しもが逆送されていることに気付い

た。バイカル湖を日本海と思った時もあったが、降車させられた駅は四千五百キロ地点（ウラジオウモスクワ間は九千キロ）で、バイカル湖のはるか北西部タイシエツトであった。そこより九十二キロ（起点タイシエツト）地点の、以前監獄に使われていた監視望楼付の收容所に入れられ、抑留生活が始まった。

当時、タイシエツト地区に收容された日本軍抑留者は約五万人。これらの作業大隊は、戦後直ちに建設が行われたBAM（第二シベリア鉄道）鉄道のタイシエツト―ブラーツク間、約三百五十キロの区間の鉄道建設の強制労働に従事させられた。BAM鉄道はバイカル・アムール鉄道の略称。時あたかも、音も空気も凍るシベリアの極寒マロウズも間近な、昭和二十年十月の末を目前にしたころであった。

收容所の周囲は高さ約四メートル、三重に有刺鉄線が張られていた。右手に墓地があり、朽ち果てた木の墓標と雑草の生い茂った土饅頭が散在し

ていた。夕闇の中で見た瞬間、「ここで死ぬまで働かされるのか？」と鬼気迫るものを感じた。(以前ここにいた囚人達がチフスに罹って多数死亡したと後に知る)

入ソ当時、ソ連の受け入れ体制は皆無に等しく、先ず荒廃した収容所の修理に掛かった。器材の種類も少なく、ひたすら創意工夫である。傾いた建物人は海戦術で起し、破れた窓硝子は破片の重ね継ぎで修理し、冬將軍の猛襲に備えた。支柱の穴掘りは、掘るよりも薪集めが仕事だった。凍った地面は石よりも固く、薪を燃やしおき火をつくり、少しずつ削るようになった。当初、食糧が少なく皆、次第に衰弱していった。黒パンの配給は一日分三五〇グラムというが、当初は輸送の関係か、夜の食事は黒パン五〇グラム(マッチ箱厚大)の日も続くことがあった。スープは塩汁にふやけたエンドウの皮が数粒浮いていた。たまたま動物の骨があれば割って赤茶色の骨髓を食べ、あとは乾燥、粉末にしてカルシウムと呼びブリカケにした。松

の表皮の下にいる白い松虫をタンパク質と言って食べ、時にはネズミもスープにした。白樺の樹液はビタミンとして体力保持に努めた。越冬前後、疥癬患者が続出し、宿舎の一棟が隔離病棟にあらがわれた。この時期、全員が栄養失調になっていた。夜は南京虫の猛襲にさらされた。電灯は無く、ランプは有っても灯油は無いので、樹脂の多い肥松を割箸状に割って燃やし、食事分配の時だけの明かりとした。火打石と火縄で火種とした。それをカチューシャと言っていた。

年が明けると本格的な作業が始まった。作業はバム鉄道建設に関連した多様なものだった。①森林伐採。②原木の山出し、車と牛馬による運搬作業。③自動車への積み下ろし作業。④製材工場の建設では機械の据付まで行った。原動機は満州より運び込まれたヤンマー製品だった。鋸屑の運搬は機械との闘いで、機械が動いている間は一瞬の休みもなく、ターチカと呼ばれる木製一輪車で追いつけられ、製材された木材の選別から、スクラ

ードという井桁積みの集積、枕木運搬、原木から板にする木挽き等。⑤鉄道床土盛り、レールの敷設等々。深夜の原木積み下ろし作業は苛酷だった。極寒の真夜中にたたき起こされての作業で危険を伴った。バラス下ろしには音を上げた。五十トンの無蓋車に満載の凍りついたバラスの上で薪を燃やし、氷を溶かして夜明けまでに下ろした。⑥倉庫、住宅、火薬庫の建築。⑦側溝掘り、道路修理（湿地帯で、冬期、松の原木を半割にして敷き並べる）⑧国営農場作業、堆肥散布、麦の種播き（機械を馬に曳かせ共に歩く）、人参の苗の間引き、ジャガイモ（カルトーシカ）畑の除草（除草機を馬に曳かす）、草刈作業（セーナーコース）、立った姿勢で使用する長い把手の棒付きの鎌で作業を行う。

伐採

森林での伐採は危険を伴う重労働作業で、シベリア抑留者の多くがこの作業に従事し、数知れぬ犠牲者を出している。

伐採作業は二人一組で行う。冬は厳しい寒さと闘いながら、酷暑の夏は蚊とブヨの猛襲を防ぐため防虫網をかぶる。事故防止のため隣の作業班とは五十メートルの間隔を保持する。

森林に入ると先ず薪を集めて焚火をした。冬は暖をとり、夏は松葉をいぶして蚊とブヨを追い払い、焚火の煙は各作業班の所在を明らかにした。作業は、ソ連側の定めた伐採基準と安全規則により行った。次の手順で伐採を行った。先ず伐り倒す木の根元約三十センチ程度上のあたりで、木を伐り倒す方の面に受け口をつくる。受け口はピラー（二人用鋸）で木の径の三分の一まで挽き、上の方からタポール（斧）で楔形に幹を削りとる。次に反対側の幹を少し上の方から鋸を入れて挽く。：木が徐々に受け口側の方へ傾き出す。この時、開きだした木口に鉄楔を打ち込み、鋸を挽きやすくして倒れるまで鋸のピッチを上げて挽く。

木がゆっくり動き始めるこの時、相番と木の倒れる方向を予測し、逃げる心構えで鋸を挽く手を

早める。大木が倒れる瞬間の光景は壯観ですさまじい。ゆつくりと、時には回りながら、次第に速度を増して倒れる。周りの木の枝をなぎ飛ばし、天地をゆるがす響きを轟かす。その瞬間、「やったーッ！」と思わず歓声上がる。だが油断のならない一瞬でもある。なぎ飛ばされる枝は小枝でなく二十センチ以上の太さで、予測できない方向から凶器として襲ってくるからだ。

伐木はソ連側の指示の長さに玉切りする。枝は全部集めて燃やす。

往時を思うとき万感胸に迫る。悲運にも帰国の夢を果たし得ずシベリア凍土の地に、また戦陣に散り、満州の土に眠れる戦友を残し、後る髪を引かれる思いで帰国した。

昭和二十四年十月二十日、舞鶴へ上陸。復員する。

終戦から六十一年のこの夏、戦陣に散り、戦禍に斃れた軍人軍属及び一般邦人の戦没した方々に思いを致すとき、『旧満州では中国側の事情で、こ

れら戦没者の慰霊碑もなく、墓標もなく』まことに痛恨の至りです。戦没者の御霊に謹んでご冥福をお祈りいたします。

合掌